

ヘブル3章 「イエスのことを考える」

1 A モーセより優れた忠実な者 1 - 6

2 A 不信仰の心 7 - 19

本文

ヘブル人への手紙3章です。私たちは今、ユダヤ教に戻ろうとしている兄弟たちが多くいる、ユダヤ人信者に対する手紙を学んでいます。不信者のユダヤ人がこれらの信者に対して迫害を加えているので、神殿礼拝を始めとするユダヤ教の生活の中に戻っていきこうしました。そこで、著者は、私はおそらくパウロではないかと思うのですが、著者は、古い生活に戻ってしまうことの危険を話しています。

2章1節で、「ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。」と言いました。濁流のように押し寄せてくる圧迫の中で、初めに聞いたイエス・キリストの福音から、いつの間にか離れてしまう危険を話しています。

そこで著者が強く思い出させていることは、「イエスのお姿をよく考えなさい」ということです。3章1節は、「イエスのことを考えなさい」という勧めがあります。この「考えなさい」は、「じっくりと調べ、観察し、そのことを思いめぐらす」という意味合いがあります。私たちは、「イエス」という名は使っていても、イエスをイエスとして、神が啓示されたようにあがめているのかどうか、自問しなければいけません。私たちは、この世にある思い煩いで、イエス様を自分の思いの中に矮小化する過ちを犯しています。「主よ、主よ、と言う者がみな、天の御国に入るのはありません」と主が弟子たちに言われたように、その名を口にしていることがその人が救われていることを意味していません。大事なものは、イエスの名を口にしていることではなく、この方をこの方としてあがめているかどうかなのです。

6章19節には、「この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし」とあります。どんなに海が荒れても、錨があればその船は漂流することはありません。この世の荒波を生きている中で、その荒波をどのように乗り切るかを考えるよりも、イエスの栄光を眺めることのほうが、はるかに安定するのだということです。

1 A モーセより優れた忠実な者 1 - 6

3:1 そういっわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。

「そういうわけですから」という言葉から始まっています。この接続詞があるときは、これまでの話の続き、またまとめになっていることを知ってください。ヘブル書全体の主題として、著者は 1 章 3 節で、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれた高い所の大能者の右の座に着かれました。」と言いました。そして、その栄光を教えるために、彼は、御子がいかに御使いよりもすぐれているかを話しました。御使いは、神の御座のそばで仕え、大国をも動かすことができる、主権、支配、力であるのに、御子はこの万物の相続者であられ、万物の王であられる方です。そして父なる神ご自身がこの方を神と呼びました。

そして、著者は、この方の国を私たちは相続するという、救いの偉大さを話しました。人は、こんなにも小さな存在にも関わらず、「地を支配せよ」という命令のごとく、被造物を相続する特権を与えられました。けれども、アダムの子によってそのようになっていません。けれども、キリストがその人の負債を担ってくださいました。主は、多くの苦しみを経て、罪の贖いを成し遂げたことによって、私たちをその栄光の中に連れ戻すことがおできになる方になりました。今は、私たちを兄弟とまで呼び、共に教会の中に入れてくださるのです。

そして、私たちが死ぬべき肉体を持っていることに対して、ご自身が死ぬことによって、悪魔の仕業を打ち破り、私たちを死の恐怖から解放してくださいました。さらに、今の肉の弱さを、ご自身が肉体を持っておられたので、助けることがおできになります。

そこで、「天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち」という呼びかけをしています。とても親密な思いのこもった言葉です。私たちが、この地上のことではなく、御子という天に関わる啓示を受けています。神からの啓示がなければ、決して御子について私たちは知りうることはできませんでした。そして私たちは、神の御座のある天に引き上げられます。そして、「聖なる」という言葉は、この方の所有のものになった、世から別たれた者として話しています。その中であって、私たちは真の兄弟というつながりを持つことができるのです。

そして、「私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司」と言っています。イエス様がどのように、使徒であられるのか？ 1 章の内容です、この方は万物の相続者であられる御子であり、その御子であられる方が人となった、ということです。人になることにより、天から御父によって遣わされたということです。「使徒」というのは遣わされた、という意味です。ですから、イエスが「使徒」と言うときは、神の栄光の輝きをもった方、そして地上に遣わされた方ということです。1 章の、イエスの神性、神であられることが強調されています。そして「大祭司」は、人となられたイエスを強調しています。人として、その弱さを負いながら父なる神に近づく仲介者であります。これは 2 章の中でのイエスの人性、すなわちイエスが人であり、その苦しみがあったことを表しています。

そして、パウロはこの方を「私たちの告白する」方として言っています。イエスが主であると口で告白して救われます。この告白を恥じる時、人の前で自分がイエスが自分の主であると告白することを避ける時、その人は父なる神の前で認められないという危険を持っています。

3:2 モーセが神の家全体のために忠実であったと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実なのです。

ユダヤ人にとっては、御使いと同じように、力と権威を持つ存在はモーセです。モーセが神の代理者であり、モーセに逆らうことは、神に逆らうことであり、モーセが語ったことは神の律法でありました。だから、イエス様はパリサイ人や律法学者から絶えず、モーセの律法に反することを発言するように誘導されていました。けれども、イエスはモーセよりも優れている、偉大な方であることを、著者は論じていきます。御使いよりも優れた方であるだけでなく、モーセよりも優れた方です。

モーセに大きな力と権威が与えられていたのは、彼が神に対して忠実だったからです。姉のミリヤムそして、アロンがモーセを中傷したときのことを思い出してください。「しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。（民数記 12 : 7）」そして、ミリヤムはらい病にかかりました。忠実であるがゆえに、神が彼に恐ろしいほどの神の力と権威を与えられたのです。

イエスも同じでした。父なる神に対して忠実な方であられます。イエス様は、どのような時にも、御父がお語りになったことを語られ、御父が行なわれることを行ない、ご自分で御父から離れて単独の行動を取られることは、一切ありませんでした。したがって、イエスさまはピリポや弟子たちに対して、「わたしを見たものは、父を見たのです。」ということがおできになったのです。黙示録にて、白い馬に乗られた再臨のイエスさまが、「忠実また真実（19:11）」と呼ばれています。

3:3 家よりも、家を建てる者が大きな栄誉を持つと同様に、イエスはモーセよりも大きな栄光を受けるのにふさわしいとされました。3:4 家はそれぞれ、だれかが建てるのですが、すべてのものを造られた方は、神です。

モーセは神の家の一員でした。ここで言っている「家」とは、「家族」という意味合いのほうが強いでしょう。イスラエルの家は神が造られて、モーセはイスラエルの家を指導者、治める者ですが、彼自身もその家の一員です。けれども、イエスはこの神の家を造られた方です。モーセとイエスとの圧倒的な違いをお話したいと思います。出エジプト記 3 章 13-14 節です。「モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところへ遣わされた』と。」ヤハウェなる神が、「わたしは、『わたしはある』という者である」と言われました。そこでヨハネ 8 章 58 節には、「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』のです。」とイエスは言われました。父なる神と一つであられる御子が、モーセに対して、「わたしはある」と語られたのです。

3:5 モーセは、しもべとして神の家全体のために忠実でした。それは、後に語られる事をあかしするためでした。

3:6 しかし、キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし私たちが、確信と、希望による誇りとを、終わりまでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。

モーセが神の家全体に忠実である姿は、後に来られるメシヤを証しするためでありました。モーセは自分が死ぬ前にこのように預言しました。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。（申命 18:15）」けれども、モーセはしもべです。その反面、イエスは御子なのです。家の中において、しもべと、その家を造った方の御子では圧倒的な差異です。

そして、ヘブル書の著者が強調している言葉があります。「確信と、希望による誇りとを、終わりまでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。」確信と、希望による誇りとは、イエスこそが自分たちの救い主であるという確信と、その希望による誇りであります。イエスの御名によって救われるという確信、希望による誇りです。「確信」とは、ヘブル書のほかの個所で「大胆」とも訳されています。もともとの意味は、無罪であることを確信している被告人が、自分の無罪を、罪意識をまったく持たずに弁明する、というものです。恥じ入ることなく、はっきりと確信をもって話すことです。人を恐れることなく語る自由を持っています。

そして、「希望による誇り」とは、この方が大いなる栄光をもって帰ってこられることを喜んでいる姿であります。「またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。（ローマ 5:2）」

そして、「私たちが神の家」だと言います。モーセの治める家ではなく、そのモーセ自身の主であられる方、あらゆる主権と力、支配を超えた方が直接治める、教会という神の家なのです。ここで私たちは、自分の生活が御子の治められる神の家の中にいるのかどうかを確かめないといけません。私たちは、当時のユダヤ人信者と同じように、地上にある家、あるいは共同体の中にしばられているのではないのでしょうか？ 当時、ユダヤ人を恐れて、主イエスによって癒されても自分の罪を捨てなかった男がいます。ベテスダの池で足を治していただいた男です。ユダヤ人指導者に、彼がイエスであると告げ口しました。「罪から離れなさい」とイエスが勧めたからです。そして、生まれつき盲目の男が癒されましたが、その両親は彼から聞いてくださいと言って、やはりユダヤ人を恐れました。私たちが、他の人たちからどう思われるかを気にしている時は、御子の治められる神の家ではなく、もっと小さな家の中にいる、ということになるのです。

2 A 不信仰の心 7 - 19

3:7 ですから、聖霊が言われるとおりです。「きょう、もし御声を聞かざらば、3:8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。3:9 あなたがたの父祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。3:10 だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかった。3:11 わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に

入らせない。」3:12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。

著者が、信仰から離れることの警告を話しています。ヘブル 2 章 1-4 節に続いて、二度目の警告です。聖霊によって言われた、と強調している、その聖書箇所は詩篇 95 篇です。開いてみましょう。「1 さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。2 感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。3 主は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。4 地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。5 海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。6 来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。7 主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞くなら、8 メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。9 あのと看、あなたがたの先祖たちはすでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした。10 わたしは四十年の間、その世代の者たちを忌みきらい、そして言った。「彼らは、心の迷っている民だ。彼らは、わたしの道を知ってはいない」と。11 それゆえ、わたしは怒って誓った。「確かに彼らは、わたしの安息に、入れない」と。」

主に向かって、喜んで、高らかにうたっている詩篇です。主がいかに大いなる方か、その創造の業をほめたたえ、他の神々とは比べ物にならないと言っています。そして、この創造主にふしおがみ、自分たちはこの方の牧場の羊であると告白しています。

そこで、メリバの事件、すなわち荒野の旅をしているのに水がないので、神なんかここにはいないではないか、と主がおられることを試した事件に言及します。私たちが、これだけ偉大な方が私たちの神であられるのに、日々の生活の不便や困難によって、この方を捨て、自分の道を歩むことをすれば、イスラエルと同じ過ちを犯す、ということでもあります。

大事なものは、「悪い不信仰の心」という指摘であります。なぜ不信仰が悪いのか、それは次の節に出てきますが、不信仰によって罪に陥るからです。主がこれだけ素晴らしい方であること、これだけ素晴らしい救いを得ていることを見ていないこと、じっくり考えていないこと、これをないがしろにしたために、自分の目の前にある問題に押し流されて不信仰に陥ったのです。次に著者は、引用した詩篇 95 篇 7-11 節の箇所を説き明かします。

3:13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。

信仰というのは、溜めておくことのできるものではありません。主の恵みが与えられたときに、「後で取っておいて、それで信じよう」と引き伸ばすことはできないのです。もし引き伸ばすのなら、次に恵みの機会がある時には、

さらに受け入れるのが難しくなります。心がたかくなっているからです。「主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。(イザヤ 55:6) 」

だから、「日々互いに励まし合」う必要があります。「この「励ます」のギリシヤ語は、「援助のためにそばに来る」という意味があります。ヨハネ 14 章 16 節では、聖霊が、「パラクレテ」すなわち「慰め主」と呼ばれています。・聖霊は、そばに寄って助けてくださいます。信者も同じです。互いにそばに来て助ける必要があります。特に、他の信者が困難に遭っていたり、霊的に押し流されていたりするなら、そうするべきです。(The Greek word for exhorting means "to come alongside in order to help." In John 14:16, the Holy Spirit is given the term "Paraclete" or Comforter. ...The Holy Spirit comes alongside and helps. Believers are also to come alongside each other and help, especially if they see another believer in trouble or drifting spiritually.)(Fruchtenbaum, A. G. (2005). The Messianic Jewish Epistles: Hebrews, James, First Peter, Second Peter, Jude (1st ed.) (47). Tustin, CA: Ariel Ministries.)

それを「きょう」行います。私たちがこのように集まるのも、集まる時にしかない神の恵みがあるからです。その恵みにしかない、罪の悔い改めと清めがあるからです。だから、信仰は生きています。「生きる」という言葉の感じは生命のそれではなく、活動のほうを書きました。その時に躍動しているものです。

そして私たちの心を頑なにするのは、「罪の惑わし」とあります。罪は、自分は大丈夫だと思わせてしまう魔力があります。本当は不信仰になっているのに、自分は信仰を持っている、いや教会に通っている人々よりも、実はもっと霊的なのだ、と過信することさえあります。ああ、なんと人は自分を惑わす存在なのでしょう！ 罪によって、人は自分のありのままの姿に対して盲目になり、御霊に属する事柄について、無感覚になってしまうのです。

そして、ここの「頑な」という言葉は、文字通りかたくなってしまいますことです。例えば、自分の指にペンだこができているとします。ペンをずっと持っていたので、その指先の部分がかたくなって、そこをペンで突き刺しても痛くないほど硬くなっている人がいると思います。これが、心の中で起こっているのが、「心をかたくなにする」ということです。きょうにしか与えられない、神の御声をその人が、不信仰によって聞き入れないとします。あるいは、罪を悔い改めたくないで、御言葉を受け入れません。そうすると、その人はそのままの状態にいることはできず、心がかたくなにされていきます。これを繰り返していると、心はほんとうにかたくなになり、無感覚になり、自分に起こっていることに対して、何も感じることができなくなってしまいます。信じることができなくなる、という状態に陥ってしまいます。

3:14 もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

著者は繰り返します。「最初の確信」です。主イエスご自身の証し、使徒たちの力ある業、そして聖霊の賜

物によって、はっきりとイエスこそが救い主であることを彼らは知りました。それを保っていなさい、という勧めです。

初代教会には、異端という暴風が吹いていました。その時にヨハネが第一の手紙の中で、単純な命令を書きました。「あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。それがキリストご自身の私たちに与えられた約束であって、永遠のいのちです。（1ヨハネ 2:24-25）」初めから聞いたことを、その確信を保ち、そしてその栄光を大いに喜びます。

これを、次に大事なのは「終わりまでしっかり保」つということです。信仰の競走は、長距離走です。途中まで早く走っても脱落します。ヘブル 12 章 1 節に、ある勧めはこれです。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」

そして私たちは、「キリストにあずかる者」となります。キリストご自身を分け前とすることができます。この方のすばらしさをいただくことができます。具体的には、この方は神の御子でありますが、御子にある財産を、私たちが養子になることによって分け与えられるようになるのです。2 章 10 節で、「神が多くの子たちを栄光に導く」とありますが、このことがキリストのうちに私たちがいることによって実現するのです！

3:15「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」と言われているからです。3:16 聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。

著者は今、彼らの先祖たちが、どのような道を歩んだかを思い出させています。イスラエルの民が神の不思議と力あるわざによって、エジプトから出ることができました。荒野の旅をしましたが、そこで彼らは数多くの、神のしるしを見ました。それにも関わらず、イスラエルの民は神を試して、神を信じませんでした。そのために、彼らは荒野で 40 年間さまよわなければいけませんでした。カデシュ・バルネアへ、シナイ山からの道のりはたった 1 1 日のはずでした。けれども 40 年間さまよいつつ、ヨシュアとカレブを除く 20 歳以上のすべての者が荒野で死ななければいけませんでした。つまり一世代が、神のしるしを見ながら、滅んでしまった歴史をイスラエルの民は持っています。

このことによって、イスラエル人であるからといって、自動的に神の国に入るのではないことを教えています。御子の相続されている御国に入るためには、信じて忍耐する営みが必要なのです。もしそれがなければ、荒野で死に絶えたイスラエル人と同じようになってしまうのだ、と言っています。ここで大事なのは、「聞いていながら」という 16 節の言葉です。4 章でパウロが詳しく解説しますが、神の言葉を聞いているだけではそのまま救われるのではない、ということです。信仰によって結びついていなければ、御言葉は人を救わないのです。

3:17 神は四十年の間だれを怒っておられたのですか。罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか。

ここで強調されているのは、「罪を犯した」ということです。彼らはカデシュ・バルネアで罪を犯しただけでなく、その後も罪を犯し続けました。コラの反乱がその大きな一つです。そのために多くの者が荒野で死にました。私たちに試練があって、そのことで落ち込んで、神に不信を持つときに危険です。神への信頼を捨てる時、私たちはその苦味からあらゆる罪や偽りを行うようになります。

3:18 また、わたしの安息に入らせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。3:19 それゆえ、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。

最後に、彼らは従いませんでした。信じるということには、神への深い信頼が含まれます。深い信頼があれば、そこには神の命令に対する従順があります。従順な子が父に従うように、ただ従うのです。そして服従もあります。自分の権利を主張するのではなく、自分の意志を神の前で従わせるのです。これをしなかったので、彼らに約束された地で安息を得ることができませんでした。

そして著者はまとめています。これらは「不信仰のため」であったということです。私たちは、表面的な行いを注目しますが、ヘブル書の著者は、それはイエスをよく考えていないため、この方へ全幅の信頼を寄せていないためであると、もっと内面的な問題を取り上げているのです。私たちはどうでしょうか？ 今、自分の周りで起こっている問題で、それが神の良い約束への信頼の欠如から来ていることはないでしょうか？ 日々、励まし合いましょう。そして、信仰の使徒であり、大祭司であられるイエスを見つめましょう。

次回、4章は、最後に語られた「安息」についての説き明かしです。私たちが魂の安らぎを得る、その安息がどのような形で得られるのか、それをじっくり見ていきます。